

ハイデルベルク信仰問答解説教7「疑いなき信仰」(2011年9月18日 礼拝説教)

【聖書箇所】

わたしは歩哨の部署につき、砦の上立って見張り、神がわたしに何を語り、わたしの訴えに何と答えられるかを見よう。主はわたしに答えて、言われた。「幻を書き記せ。走りながらでも読めるように、板の上にはっきりと記せ。定められた時のために、もうひとつの幻があるからだ。それは終わりの時に向かって急ぐ。人を欺くことはない。たとえ、遅くなっても、待っておれ。それは必ず来る、遅れることはない。見よ、高慢な者を。彼の心は正しくありえない。しかし、神に従う人は信仰によって生きる。」(ハバクク 2:1-4)

ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。このように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。(ローマ3:21-26)

【説教】

今日は、第七主日、問20-23を読みます。お気づきのよう質問23では、使徒信条がそのまま全文、問答の答えとして告白されております。そしてこの後、問26からになります。使徒信条についての問答が始まります。信仰問答は、この使徒信条を、問22において「キリスト者が信じるべきこと」とし、またそれが「福音においてわたしたちに約束されていることすべて」の要約であるといえます。それは言い換えれば聖書の要約であります。

問19のところを思い起こしていただくと、聖なる福音について、信仰問答は、ただイエス・キリストの十字架と復活の御業だけでなく、それはすでに創世記のエデンの園の話から始まり、族長たちや預言者たち、また律法の犠牲なども福音を表していたと述べています。そのように旧約聖書においてすでに予見、予告されていた福音が、ついに御子イエス・キリストにおいて成就した、ここに明らかになったと告げるわけでありませぬ。このように旧約聖書から新約聖書と聖書全体に福音が啓示されている。そのようにわたしたちは聖書全体から福音を読むべきであります。

しかし、聖書全体と申しまして、これは膨大なものであります。その御言葉一つ一つから福音を確かめていくならば、どれだけ時間があっても足りませぬ。聖書を通読することは生涯の内に何度もできることですが、聖書全体を福音として説教する、あるいはそのように聖書全体を福音として聞くとなると生涯でそれが達成できるかは、なかなか難しいことでしょう。ではわたしたちは聖書全体を理解することなく、聖書のほんの一部分を理解したに過ぎないということなのでしょうか。その福音の啓示のほんのひとかけらしか受けていないということなのでしょうか。

ある日本の神学者が譬えとしてこう述べています。聖書を煮詰めて、煮詰めて、その凝縮されたエッセンス、結晶、それが使徒信条である。ここに聖書の伝えようとしている福音が凝縮されている。信仰の核心を短くまとめればこうだ。パウロは1コリント15:1-2のところで次のように言います。どうもパウロは短くまとめられた福音の言葉を伝えているようです。これを覚えていればよい。それが聖書全体の向かうところを辿ることになる。これは非常に助かるのではないのでしょうか。

使徒信条は、基本信条と言って、世界中の教会が一致して受け入れている信仰告白として位置づけられています。多くの教会では礼拝でこの使徒信条が告白され、またそれによって洗礼が授けられてまいりました。わたしたちの日本基督教団の信仰告白も使徒信条に前文を付した形になっており、基本的にはこの使徒信条を告白する内容となっております。古来、教会では

洗礼志願者の学びに使徒信条が用いられ、志願者はこれを暗唱して、洗礼が授けられたのであります。紀元215年頃に書かれた『ヒュポリュトスの使徒伝承』という古代教会の礼拝式文が残っておりますが、そこにはこの使徒信条の原型とも言うべき、非常に内容の似た文章がすでに洗礼式で告白されていたことが伝えられています。

ここで注意したいことは、この使徒信条は洗礼と深く結びついているということです。洗礼志願者が聖書から正しく福音を聞き、それを信じるためにはどうしたらよいのか。そのための聖書の手引き、信仰の手引きがどうしても必要になるのです。それこそ聖書全巻をひも解く暇はない。それではいつまでたっても洗礼は授けられないのです。でもこれだけをしっかりと覚えていればよい。その救いの筋道とも言うべきもの、その言葉によって聖書の示す福音に到達することができる。その聖書の示す福音の要約を教会は生み出してまいりました。それが使徒信条であり、またそれが教理というものであります。

しかし、それは洗礼を受ける時だけに必要ということでもありません。信仰者全般においても、そういう福音の要約があることが信仰の大きな助けとなるのです。信仰の生涯において、時としてそれが危うくなることがあります。聖書から正しく福音が聞けない。あるいは福音から逸れていく誘惑があるかもしれません。その時に絶えず軌道修正してくれるものが必要です。信条という言葉はラテン語で「シンボリウム」と言います。それは元々、「旗印」という意味でした。それは兵士が闘いの最中に自分たちの仲間を見失うことがある。その時に、この旗印が自分たちの陣地を知らせ、その隊を見つけ出し、進むべき方向を知らせる役目を持っていたのです。わたしたちの信仰の闘いにおいても、そういう旗印が必要なのです。それがなかったならばどんなに心細いことでしょうか。

先週は、高齢者祝福がありました。お元気で毎週教会に通うことができる方々もおられますが、もちろんそのような方々ばかりではありません。高齢のために、またご病気で身体の自由がきかない方々も多くおられます。先週はその方々にお祝いの品を届けることに費やしました。ある方は脳梗塞で少し身体がご不自由であります。最近では、ベッドに横たわったままでお話をする事が多くなりました。枕元には聖書や届けた週報などが置いてありますがほとんど読むことができないと言われます。目も弱られたのです。ご高齢の方々には、わたしたちが普通に聖書を読んだりすることもできなくなるのです。でも、その方は毎朝目を覚ますと、使徒信条を告白し、主の祈りを祈ると言われます。この二つは語んじているから何ができなくてもベッドに横たわったままでもできると言うのです。そのように神さ

まを礼拝する。聖書を読めなくても、使徒信条によって聖書の示す福音を毎朝聞いている。ああ、そうやって信仰を守り、保っているのかと教えられました。

いずれにしても、そのような福音の要約としての使徒信条がわたしたちの信仰生活に初めから不可欠であり、助けとなることは間違いのないことだと思います。その使徒信条についてはこれから信仰問答が解き明かしていくことになります。

その前に、今日の間答では、そのような使徒信条に言い表されている信仰をわたしたちがどのような心で信じ受け入れるかということが前提として教えられています。ともするとわたしたちはこういう信条を言葉だけの問題として受け止めがちであります。信条に告白されている内容よりも、その言葉だけを重視する。そういうものを教条主義といえます。またその言葉が無内容化していく。機械的に形式的にそれを受け入れるだけになる。礼拝での告白も、ただ意味もなく語っているだけということになる。そうならないために、どういう心をもってこれを告白していくのか。問20を読みましよう。

まづここにすでに抵抗を感じられる方もおられると思います。ここには、わたしたちが陥りやすい一つの誘惑があります。それはすべての人がアダムを通して罪を犯したなら、キリストによってすべての人が救われて当然だろう。その救いはすべての人に及ぶということ。そういう考えを万民救済と言います。わたしたちには密かにそういう願望があります。そこに神さまの寛容さがある。そういう神さまでいてほしい。確かに神さまの救いはすべての人に開かれているでしょう。すべての人が救いに招かれているということと言える。しかし、すべての人が救われるわけではないのです。ここは注意しなければなりません。

神さまの救いに関して、わたしたちは自分の期待通りそれが叶うものと信じていることがある。しかし神さまの救いはわたしが決めることではありません。神さまの御手にあることです。その決定は、完全にわたしたちの手を離れています。それは羊と山羊を分けるように神さまによってははっきりとその線がつけられるのです。それをわたしたちの信仰では神さまの選びと言います。ですから一人でも多くの人がその選びに気付くように、神さまの救いに入れられるようにわたしたちは伝道するのです。もしすべての人が自動的に救われるのであれば、もはや伝道する必要はありません。大切なのはその救いに気付かされ、それに応えていくことでもあります。そういうわたしたちの側の応答がここで求められているのです。

そしてその応答こそ、わたしたちの信仰なのであります。主イエスが福音書において繰り返し言われます。「あなたの信仰があなたを救った」と。信仰がその鍵となります。わたしたちは自動的に機械的に救われていくのではない。信仰によって救われるのです。ここは揺るがすことのできない部分です。ここで信仰問答はヨハネ福音書3：16を挙げています。「神は、その独り子をお与えになったほどに世を愛された。独り子信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」「独り子信じる者が」とあります。信じないものまでも救われるのではない。信じる者が救われる。それが聖書のはっきり告げていることです。

そしてそれは今日読んだ御言葉にも明らかです。ローマ3：21以下を読みました。ここには神さまの義がどのように救われるかが明らかにされています。ここで一貫して述べていることは「イエス・キリストを信じること」その信仰によって義とされるということです。宗教改革者はここを根拠にして「信仰義認」の教理を導きだします。当時は、カトリック教会との対立があります。そこで大きな闘いは、信仰が無内容化していくことでありました。免罪符を買えば、洗礼を受ければ、自動的に救われるかのような受け止め方がなされた。信仰が問われないのです。そういう中で洗礼や聖餐は魔術的な行為として、まるでその行為そのものに救いの効力があるかのように解釈されるのです。キリストが不在なのです。そうなると信仰生活の

すべてが形式化されていきます。そこで改革者は立ち上がりました。行為ではない。肝心なのはキリストを信じる信仰であることを明らかにした。そういう闘いをしたのが宗教改革であり、わたしたちの教会なのであります。

しかし信仰といっても、何でも信じていけばよいというわけではない。それが「まことの信仰」である必要がある。その応答は神さまの招きにあったものでなければならぬ。見当違いのもので応えても意味がないのです。では「まことの信仰」とはどういうものか。そこで問21です。

ここでどうしてもわたしたちの心にとめておきたい二つのことがあります。それは「確かな認識」と「心からの信頼」です。「確かな認識」とは、「神が御言葉においてわたしたちに啓示されたことすべてをわたしが真実であると確信する」ことであると述べています。それはキリストにおいて成就した神さまの救いのこと、福音のことと理解してよいでしょう。その福音を認識する。理解することです。その内容がまさにこの後の使徒信条にすべて言い表されていることです。信仰とは、ただ何でも信じていけばよいということではなく、それが正しいもの、聖書に示されている神さまの救いの出来事、福音であることが重要なのです。そこから離れて自分勝手に神さまを信じていても、それは独り善がりなものに過ぎません。信仰はそういう個人の願望や思いを越えて、絶えず普遍的なものであります。問22で「公同」という言葉がありました。それはわたしだけに通用するもの、この教会だけで分かっていることではない。全世界の教会で、また時代を超えて、わたしたちを結びつける一つの信仰なのです。そういう公同の信仰によって、わたしたちは同じ一つのキリストの体を生きるものとされます。この一つの確かな認識がわたしたちを結びつけるのです。

でもそれだけではない。そこに「心からの信頼」がなければならぬと信仰問答は述べています。ただ知識として知っているということではない。それではまだ信仰は他人事なのです。自分のものになっていない。信仰というのは、キリスト教の知識のことではありません。キリスト教主義の学校で聖書が教えられます。子どもたちにどれほど熱心に聖書の構造や、教会の歴史が教えられても、それが即信仰になるかと言えば必ずしもそうならない。そこには知識だけではない。別のものが働かなくてはならない。それが心からの信頼です。その聖書が示す神さまの救いの出来事に信頼して飛び込むこと、そうして初めて信仰は自分のことになります。問21に「他の人々のみならずこのわたしにも、罪の赦しと永遠の義と救いが神から与えられる」とあります。それまでは他人事であった、それは単なる知識でしかなかったものが、自分のことになる。それは単なる知識から信頼へと変化したことなのです。その時に信仰は自分のことになるのです。その時に、主イエスの救いが自分のものとなり、このわたしのすべてがキリストと結びつくのです。それが問20で言われている「この方と結び合わされ」ということに他なりません。

でもここで信仰問答が更に強調していることがあります。それはその信頼は「福音を通して聖霊がわたしのうちに起こしてください」ということ。つまり自分で起こすのではない。神さまによって起こされるものであるということです。それは恵みであって、わたしたちの業ではありません。問21では「それは全くの恵みにより、ただキリストの功績によるものです」とあります。信仰は恵みなのです。神さまから与えられるのです。だからこそ、確かで疑いなきものなのではないでしょうか。

先ほど、救いは神さまの御手にあるからわたしたちが決めることではないと申しました。しかしそうであれば、わたしたちはその救いに関して不確かなのでしょうか。自分は救われるかどうか分からない、そういう不安にあるのでしょうか。そうではありません。わたしたちはその救いについて確かな確信を持つことができます。それはその救いを神さま御自身が行ってくださり、その心からの信頼をわたしたちのうちに起こしてくださるから、わたしたちは確信することができる。ちっぽけなわたしが考えているより遥かに大きくて確かな救いが与えられているのです。わたしたちを越えて、わたしたちの内に確かに神さまは働きかけてくださいます。その御業に心から信頼して委ねることができるように祈りましょう。

天の父よ。無から有を生み出す主よ。あなたは何も無いところに信仰を起こしてください。単なる石ころからアブラハムの子らを起こしてください。それはわたしたちの小さな願望や思考を越えて、わたしたちに思いも及ばない仕方で与えられます。この罪の私たちのためにあなたは愛する独り子を与えてくださいました。この揺るぎない出来事によって、わたしたちはあなたを心から信頼し、委ねることができます。どうぞ聖霊によって、わたしたちにまことの信仰を呼び起こしてください。主の御名によって祈ります。アーメン。